

《地獄の門》制作エピソード

《地獄の門》は、もともとパリの装飾美術館の門として、ロダンに制作が依頼されたものです。

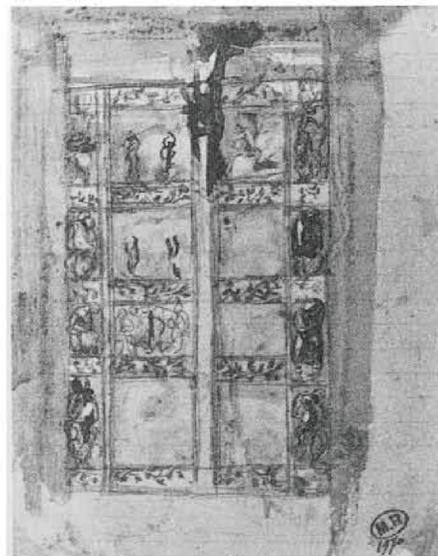
ダンテの長編詩『神曲』の「地獄篇」に描かれた地獄の世界や、ボードレールの詩集『悪の華』などに強く心ひかれていたロダンは、当初、これらの詩の中の具体的なイメージを積極的に作品に取り入れようと、構想を練りました。しかし最終的に「地獄の門」は、ロダンが思い描く独自の《地獄の門》の表現となり、また結局「門」としての機能を果たすこともありませんでした。生涯をかけてこの作品の制作にあたったロダンは、1917年、とうとう彼が亡くなる時になっても、作品が完成したとは考えていませんでした。

《地獄の門》は、ロダンの人生とともに歩んだ作品といえるかもしれせん。

《地獄の門》の構想は、制作途中でどう変化していったのでしょうか。

彼が残したデッサンや試作から、制作の跡をみることができます。初期の段階では、上のデッサンが示すように、全体が規則正しい8つのパートに分けられていました。当時は多くの教会の扉が、このような構成をとっていたのです。

しかしその後、右側の試作からもわかるとおり、この規則性はだんだん失われていき、最終的にはロダン独自の流動感あふれる構図に変化していきました。



《地獄の門》 初期デッサン



《地獄の門》 第三試作

《地獄の門》に表されている人物たちは、
どれも生々しい姿をあらわにしています。

ロダンは、死後の世界としての地獄よりもむしろ、
現実世界の激しい生そのもの、生の中にある苦悩としての
地獄を表現しようとしたのかもしれませんが。

さて、この作品の中で、現実世界に苦悩する人々を見おろし、
座り込んでひとり瞑想する男がいます。
その人は、《地獄の門》の中のどこにいるか、わかるでしょうか？
探してみましょう。

ロダンは生涯をかけて制作した《地獄の門》。

ロダンは、どんな思いを込めて

この《地獄の門》を制作したのでしょうか？

あなたは、この作品からどんなことを感じましたか？

考えたことを書いてみましょう。

この人物も、独立した像となって、
この展示室に展示されています。



この男の人は、いったいどんなことを
考えているのでしょうか？

彫刻豆知識

《地獄の門》は、もともとロダンは粘土でつくったものでしたが、これを
石こうで型どりし、青銅を流し込んでつくられたのが、現在静岡県立美
術館に展示されているブロンズ（青銅）の《地獄の門》です。（このよう
な技術を鑄造といいます。）こうしてできた《地獄の門》は世界に7体
あり、同じ原型にもとづいていますから、そのどれもが本物なのです。
ちなみにロダンの彫刻は、ひとつの作品につき12体までの鑄造が認め
られています。

《地獄の門》の中にも、この鑄造という技術によって同じ型からつくつ
た人物像が組み合わされている部分があります。

作品のいちばん上に、片手を下におろしたポーズをとった3人の姿が見
えるでしょうか。この3人の像は、実はそれぞれ同じ型から鑄造されて
いるのです！

